●墓参のため帰郷、富士参りなど　九二年十二月

東（ひんがし）に筑波　小貝（こかい）を眺むれば　吾を育（はぐく）みし大地なりけり

冬枯れてなお美わしき小貝川　洪水の日の遠き思い出

冬枯れの　鬼怒の河原に　節（せつ）想う（石下町に長塚節＜たかし＞の生家を訪ねる）

節（せつ）生家　冷え冷えと冬野に　静まれり

節生家　書斎の陰気　臭きこと

節生家　門前の田は　駐車場

節生家　門前の像の　若き貌（かお）

初乗りの　セルシオ駆って　富士参り（娘婿の運転で富士5合目へ）

冬枯れの　富士の樹海に　霙（みぞれ）降る

雲晴れて　雪の頂　富士白し

妖雲は　かくのごときか　富士隠す

昼休み工事現場のイラン人　寒風に寝て青空（そら）仰ぐ

哲学者のごとき顔したイラン人　工事現場に静座して休む

筑波山五合目以上は雲のなか　冷害の田圃に顔そらすごと

鬼怒川のほとりに働くバングラ人　節（たかし）が見れば何想うらん

（長塚節は小説『土』の作家、歌人。鬼怒川のほとりに生家がある）

白菊の花に埋もれし館長に　案内されし日有難き日よ

（神奈川近代文学館・小田切進館長のお通夜にゆく、桐ケ谷葬祭場）

館長のお通夜かくあれ一人ずつ　白菊ささげ寒夜に帰る

六十を過ぎてもいまだ悩むわれ　親子離れはかくも難きか